No. 108

Dec., 1978

# 東京工大クロニクル

主要記事

大学の教育に就いて 1.
日本人のドイツ観 2.
外国人教師紹介 4.
人事異動 4.

## 大学の教育に就いて

齋藤　進六

文明の転換が叫ばれている中で，工学教育を主とする科学教育はどうあるべきなのか。これはなかなか難しい問題だと思う。しかし，もともと工学教育ということを大学のレベルで考えるよりも，職業高校を社会がどのように受け止めているか，ということの方がより重要だと考えている。職業高校の延長としての理工系の大学教育があるわけではない。本当は高等学校で専門教育をするのは，それなりに意味があるし，英国や西独などでは，そういった機能がうまく作用している。日本の場合，工業高校などの立場を，もう少し世の中が温かい目で見てやるのにはどうしたらよいか，そういうものを含んだ使命というものを工業大学の教育の中に盛り込んでゆかねばならないのではないか。

また日教組なども普通教育に重きを置くあまり，職業高校に偏った見方をしていると思う。学歴社会が出来あがって来たのにも，これは大きな影響がある。

### 技術と文化が問題

工業大学の立場から見るとき，大きな問題のひとつに技術と文化という問題がある。大学の教育課程の2年間を入れると，学生は小学校以来合計14年間，教養課程の中で学んできたことになる。しかし実際，教養とはひとつのレベルの問題であって，生涯にわたる問題である。ある一定期間英語なり，倫理なりを学べば，それでもうおしまいというようなことではない。規格一辺倒の教育には学んだことにより，自己が鍛えられ，豊かになる。という意味は全くない。元来教育は何のためにあるかといえば，「明日，我々はこの地上にはおりませんよ。あなたたちでやってくださいよ」という文化継承の前提に立ってやっているものである。答案を書かせれば満点だが，行動には現わせないといった，そういうカルチャーは本物ではないと思う。

そういった意見で若し私に自由な立場で新しい大学をつくって見ろといわれたら，個人的にもつ構想として，7年制の技術大学を考えている。高校を含んだ形式である。そうすれば技術指向の人間に教えるべき本当の人間らしさ，ということをゆっくり教えられると思う。又，殆どの学部学生が修士コースに進む体制と現実が出来上って来ている大学ではカリキュラムを4年の学部段階で切らず，進んで6年制をとり入れ，専門教育は修士，専門基礎を学部というように考え直す段階に来ているのではないだろうか，学部4年の中に教養・専門のクサビ型構造をもち込むのも良いが，低学年の専門教育は興味と関心を持たせるもの，あるいは，必要になれば，技能的なものにして，6年制を改めて考える情勢が出来つつあるのではないか，豊橋，長岡の両技術科学大学は既にその方面に向っている。

東工大に対する世評は，人文，社会科学にも力を入れて教育を行ってきたということである。これは職人的技術者を排し，視野の広い科学者づくりを目指してきた姿が世の中にそのように，むかえられているのであろう。本学から外交官試験合格者が出るといったことも，そういう点でうなづけることと思うが世評に応じ，実質の充実を更に考えて行かねばならないだろう。また本学には実質的に講座制の制度がない。こういった一連のM.I.T.方式を作ったのは，たとえば若い助教授でも独立して研究をやれるということと，もうひとつは，やはりカルチャーを重んじた，ということなのである。カルチャーと技術を，別々にやって，ミックスすればカルチャーになるというわけではない。技術それ自身が実はカルチャーなのである。これが東工大の考え方として重要ではないだろうか。

近年どれほど文明が発展したといっても，ついここ150年，200年の間の話である。それでも一人が一つの科学の分野を研究するという学問の分化した時代に入ってきている。あと20年たったらどういう教育をしたらよいのかわからない時代になろう。もっとイクステンションして100年先，200年先，更に1000年先の工業教育はどうなるのか，それらは現実の問題ではないが，思考の世界で思考実験をして明日の方向をきめなくてはいまの教育方法ではやってゆけなくなる。そういう問いかけから，初めて今の教育をどうするか，ということが問題提起されてくることと思う。

### 増やしたい大学院生

近年，次第に大きな社会問題とさえなりつつある大学の大衆化，学生の質的低下の問題は幸い，なんとかまぬがれている。東工大では学部の学生はむしろ減ら

し，大学院の学生を増やす方向で計画をすすめている。現在，学部と大学院の学生数はほぼ同じである。

東工大では「長津田構想」とよばれる一貫した研究整備計画がある。これは神奈川県横浜市の長津田に大学院をはじめ研究所を移転，総合的な研究体制を整えてゆく方針のことである。最初はレベルの低下ということも問題となったが，杞憂に終った。

この構想の中の一つとして，全国の大学に先がけて発足したのが「総合理工学研究科」である。この独立大学院の構想は，昭和47年に発足，すでに卒業生を出した。従来の単に学部の体制をそのまま延長したものとは全く違い，文字通り「学際的」な研究体制を組んだ。これには十の専攻があり，社会開発工学と物理情報工学といった，斬新な研究対象が主要を占めている。

今後の展望として考えていることはやはり工業大学に対する一般的な見方を変えてゆきたいと考えている。技術と文化ということでも触れたが，工業大学の卒業生はハードな面では職工の親方としての技能的センス，ソフトな面では技術文化のリーダーであり，多くの政治体制と理念との共存する世界の中で，もっとも客観性のある技術経済のイノベーターでなくてはならない。すなわち，政治運営ばかりでなく，経済に於ても，もはや一国だけで成り立ちゆく時代ではなくなった。技術の進歩の予測を見きわめることも，こういった国家の運営には必要不可欠である。M.I.T.ばかりを例にとるわけではないが，経済学ではサムエルソンのようなノーベル賞学者を出したばかりでなく，現在，かの大学は，メディカルエンジニアリングの構想を進めている。これは，医学博士の称号をもつ研究者をもう一度集め，物理や数学などの教育を施そうというものである。これは米国の医学関係者から驚異の眼をもって見られており，今後の医学界の指導者は皆ここの出身者によって占められてしまうのではないかとさえ，噂されるくらいだ。東工大にも可能性をもった研究者は多数おり，今後，そういった方向にも進路を求めるべきであろう。

最後に，私の教育信念というほどのものではないが，考えていることを少し述べてみたい。かつて旧制高校の時代には，年齢的には今の学生よりも若いが〝挫折〟というものを皆体験したものだった。しかし現在，そういった自分の弱さを知る教育というものが，欠けているように思う。自分というものをきちんと見定めた人間を育成したいと思う。カルチャーとは自己から離れたものではない。科学することの中から，カルチャーがにじみ出て来るような人間教育である。

（これは，〝世界日報〟〔53.9.22〕に掲載されたものをもととして加筆したものである）

# 日本人のドイツ観

Uta Kodaira Schumpp

今日のように大勢の人々が観光旅行に出かけたり，海外居住が盛んな時代になりますと，自分が外国人であるという状況に置かれることがますます多くなってきます。その結果として，自分の態度を新しい，時には未知で不慣れな物差しに，つまり，訪れた先の国の尺度に合わせなければならないということが往々にして起ってきます。その国が自分自身の生活圏から遠く離れていればいるほど――これは何も地理的な意味で言っているだけではありません――，相手の態度を理解して自分をそれに合わせるということは余計に難しくなります。その人の顔や体つきが一見して，行った先の国の人々と違っているような場合，さらに厄介なことになってきます。容貌が似ていたり，膚や眼や髪の色が同じであれば，名もない一人の人間としてみんなの中に埋没することもできましょうが，そんなことは所詮できない相談です。

フランスで私はこんなことによく出会いました。私はドイツ女性なのですがフランス語ができますので，私の容姿からして根っからのフランス女と間違えられたわけでした。そうじゃないと私が訂正しますと，相手のフランス人の態度が変ることが間々ありました。そんなふうに態度が変る理由は，その外国人の母国について抱いている一定のイメージのせいにちがいありません。イメージといっても，その時々によって多少とも違いはあるでしょうが。このように相手の態度が一変するのは，一つには私という外国人が相手の生活圏に所属していない点から説明がつきますし，この反応は，もう一つには，大抵その外国人の国について相手が抱いているイメージに支配されているところからくるわけです。

東アジア諸国の出身者でない限り，まず日本では一目で外人だと見られます。13年このかた――私もこの日本に暮すようになってそんなに長くなるわけですが――日本人がドイツ人に対してとる心構えとか物腰が，日本人がドイツについて描いているイメージによっていかに左右されているか，何度も何度も経験してきました。

タクシーの運転手たちは，私が以前たどたどしい日本語で家に帰る道順を教えることができてほっとしますと，私がどこの国の人間かと訊ねては，いつも言ったものです。「アヽ，どいつ人，頭イイデスネ」そんな時，彼らは音楽のこと，フォルクスヴァーゲンのこと，ベルリンのこと，戦争のこと，ヒトラーのことを思い浮かべていたのでしょう。そして大抵の場合，それか

ら次のようにつけ加えるのでした。「どいつト日本ハ，トテモ似テイルジャナイデスカ？両方トモ戦争ニ負ケタ」。

もう一つ例を挙げましょう。ある晩タクシーを拾いましたら，その運転手は料金稼ぎをしようとして――まだ基本料金が百円だった頃の話です――廻り道をしようとしたのです。そこでおそるおそる私は「いつもなら別の道を走るのだが」と言いました。私の喋った日本語に感心して，お国はどちらですかとその運転手が聞きました。「ドイツ」という返事を耳にすると，メーターをゼロにたおし，何度も詫びを言い，降りるときにも，「アナタモ戦争ニ負ケタ。どいつ人ニ嘘ヲツイテハイケマセン」と言いながら，料金を受け取ろうとはしませんでした。私自身は戦前に生まれたのですが，戦争に負けたという事実についての意識は私のなかでは非常に弱いものでした。私が言葉を交わしたタクシーの運転手たちとの違いは，年齢の差からくるのだろうと思ったものでした。

このような経験をしたあとで特に興味を惹かれたのは，私が学生たちに対しておこなったドイツのイメージについての質問の解答結果でした。この学生たちは，敗戦とは実際上なんら係り合いのない世代です。ここで繰り返し私がぶつかったドイツのイメージの特徴は何かと申しますと，それはバッハ，ベートーヴェン，モーツァルト――（これは本当はオーストリア人ですが）――，アルト・ハイデルベルク，ビール，ザワークラウト，じゃがいも，ライン河，そして太った婦人といったものでした。

何度も顔を出すこのようなドイツについてのイメージを見ると，15年前ドイツのキール大学で多数の学生相手に私がおこなった連想テストのことを思い出します。「日本という語からあなたは何を考えますか」という設問に対して，解答は「フジヤマ，サムライ，ゲイシャ，キモノ，ハラキリ，カミカゼ，真珠」といったものでした。このようなイメージは三船敏郎や「羅生門」，「七人の侍」，「無法松の一生」などの映画や，さらに真珠王ミキモトによってはっきりと裏打ちされているのです。これが日本のイメージということになれば，日本人なら誰だって笑わずにはいられないでしょう。

数週間前ドイツという国についてのイメージテストをおこなって，かなり興味深い結果を得ました。この大学（東京工大）とある女子大の1年生百名ずつを対象におこなったテストです。女子学生のグループを選んだ理由は，もしかすると男女の性別による特別な違いが抽出できるかもしれないと考えたからです。

両方のグループから得られた解答は次の通りでした。まず，ビール，じゃがいも，ソーセージ，ミュンヘン，フランクフルト。その次が，ヒトラー，ナチ，ユダヤ人，アウシュヴィッツ，技術，科学。さらに，バッハ，ベートーヴェンの音楽。

なお男子学生に特徴的だったイメージとして，サッカー，自動車，カメラ，ロケットがありました。アルベルト・アインシュタイン，シュトレーゼマン，ローザ・ルクセンブルク，ハイデッガー，マルクスの名を挙げたのは1人ずつでした。ヘルムート・シュミット首相を挙げたのは5名でした。ドイツ人はとても知性的で，働き者であるとされ，他のすべての国民のなかでも日本人に最も似ていると受け取られていました。

女子学生のグループでは，ビスマルクとゲーテの名を挙げたのが15人でした。それに続くのが，トーマス・マン，ヘルマン・ヘッセ，ルター，グリム兄弟です。女子学生の場合，ドイツ人の性格はきわめて多面的に描かれていました。規律正しい，勤勉である，勇敢，運動好き，論理的，伝統的，遵法的というわけです。アンネの日記は，52名が触れていました。

このような対ドイツ観に接して私が一番驚いたのは，第二次世界大戦の出来事に強いポイントが置かれていることでした。最近になってヒトラーの映画がいろいろ上映されたり，テレビで「ホロコースト」シリーズが放映されたりしていますが，このような現象になんらかの解釈が許されるかどうかは，さらに別の調査を待たなければならないでしょう。

（工学部一般教育等外国語　外国人教師）
（工学部一般教育等外国語　助教授　野田　倬訳）

---

## 第9回学内ボートレース

**ボート部**

ボート部主催の『第9回学内ボートレース』が雲一つ無い秋晴れの下，戸田オリンピックボートコースで11月3日の文化の日に開催されました。

参加クルーも19を数え，お茶の水女子大学及び青山学院大学の女子クルーも特別参加となりました。

午前中は予選が行われ，午後になって敗者復活戦，準決勝，決勝と続きました。準決勝に残った優秀クルーは「僕の竹下さん」，「バアサンズ」，「YANGU」，「戸田の高速艇」，「老養院」，「クルーの名前は決まっていません」，「近藤研B」，「老人ホーム」，「タイガージェットシーン」，「日英同盟変隊」でした。さすがに決勝に残るクルーは実力伯仲し，スタートから横一線でとび出し，中盤を過ぎるまで差はほとんどつきません。

ゴール前100mでわずかに「僕の竹下さん」，「戸田の高速艇」が抜き出て，トップ争いが演じられ，タッチの差で「戸田の高速艇」がゴールイン。400mを漕ぎ終えた後のすがすがしさが各クルーの顔に満ちあふれている様でした。

今回のレースは，教職員，事務職員の方々の積極的な参加を募ったのですが残念ながら，参加クルーはありませんでした。次回も学内ボートレースを5月に開催しますので，教職員，事務職員の皆さん，そして東工大の学生の皆さんも是非参加して下さい。

## 外国人教師紹介

国立大学において，外国語科目または，専門教育科目を担当させるにたる高度の専門的学識または技能を有する外国人を常勤の教師として雇用する制度があります。

現在，本学では，この制度に基づき，二人の外国人の先生が学生の教育にたずさわっており，本学に貢献されておりますので，御紹介いたします。

David Butler Stewart（ディヴィット バトラー ステュワート）

客員教授，Ph.D. 所属 工学部一般教育等外国語 生 1942.12.7 卒 ペンシルヴァニア大学 1964 略歴 東京工業大学外国人教師（1976.4～現在）［学位論文］：『ル・コルビジェの建築理論』：ロンドン大学 1972

Uta Marta Kodaira Schumpp
（ウタ マルタ コダイラ シュムプ）

客員教授 文学修士 所属 工学部一般教育等外国語 生 1936.12.4 卒 キール大学 1956 略歴 お茶の水女子大学・立教大学非常勤講師，東京女子医科大学非常勤講師，早稲田大学非常勤講師，東京工業大学外国人教師（1978.4～現在）

［修士論文］：Die soziale Stellung der Japanischen. Frau vor und nach dem Zweiten Weltkrieg ：キール大学 1965.

### ◇秋の叙勲

本年度の秋の叙勲は去る11月3日に行われ，本学関係では次の2名が受章されました。

勲三等旭日中綬章：久保輝一郎（名誉教授）
同　　：草間　秀俊（名誉教授）

### ◇文化功労者表彰

本年度の文化功労者表彰は，本学関係では，次の方におくられました。

文化功労者：武井　武（名誉教授）

### 編集後記

いよいよ年の暮，本年最後の号をおとどけいたします。今年の4月に編集メンバーの交代があり，何かと忙しい1年でした。

来年も，よろしくお願いいたします。

皆様，良い御年をお迎え下さい。

**東京工大クロニクル　No.108**

昭和53年12月11日
東京工業大学広報委員会　発行 ©
東京都目黒区大岡山2－12－1
Tel.(726) 1111　内線 2032